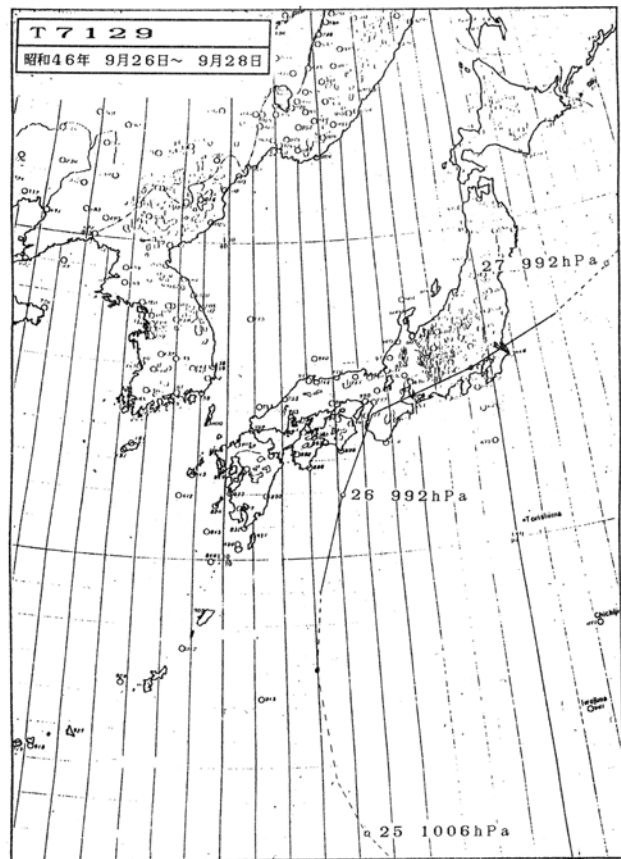


## 突然の大雨を降らせ 猛スピードで去っていったミニ台風

伊勢湾台風が近畿に上陸した12年後の同じ日、ミニ台風が想定外の猛威を振るい、県内を大雨でじゅうりんし尽くしました。わずか半日ばかりで死者、行方不明者11名を出し、猛スピードで県外へと去っていきました。

### 1. 台風の進路

グアム島の西海上で発生した熱帯低気圧が、四国の南海上にまで進行。25日午後3時の時点では中心付近の風速もわずか10メートル/秒で、台風と定義される17メートル/秒には達しないものでした。それが、26日午前3時に室戸岬南方400キロメートルの海上で、最大風速17.5メートル/秒を観測するまでに発達。同日午前11時20分ごろには最大瞬間風速26メートル/秒が観測され、午後1時ごろに和歌山県白浜町と潮岬の間から上陸し、紀伊半島、東海、関東地方を猛スピードで突っ切り、午後11時前には鹿島灘へと抜けました。その時点での中心気圧は994ヘクトパスカル、中心付近の最大風速は25メートル/秒でした。



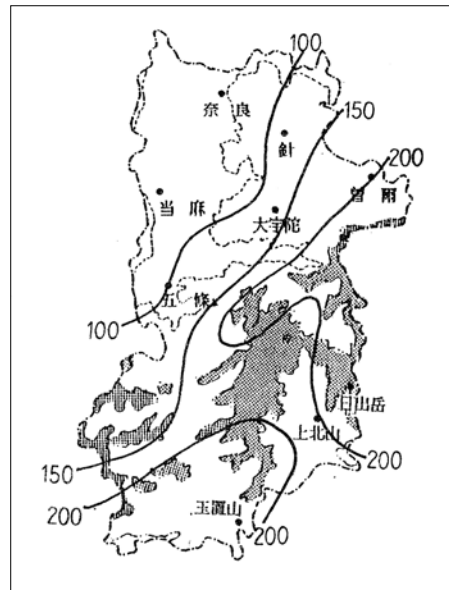
台風の進路図（『奈良県の台風40年』より）

### 2. 県内の天候の推移

事前の観測段階では台風の進行速度が速くなかったために、県内は突然の雨に急襲されたような状況でした。26日の奈良県の天気予報は「曇り時々雨」というものでした。それが、正午を中心に前後6時間にわたって大雨に見舞われ、大

台ヶ原では午前9時から午後5時の間に225ミリ、十津川村上野地で159ミリが記録されています。奈良地方気象台では午後1時20分に大雨警報を発表し、同4時10分には大雨洪水警報に切り替えられました。

県水防本部は26日午後2時45分に水防警報第一号を出し、大雨で河川の増水が予想されたため、奈良、郡山、桜井の各土木事務所や各水防団が警戒に当たりました。



総降水量分布図（『奈良県の台風40年』より）

### 3. 被害のようす

突然の大雨は県全域を襲い、奈良市や大和郡山市、橿原市の各所で道路の冠水や床下浸水の被害が発生しました。雨量が増える南部ではさらに被害が拡大し、特に吉野郡や宇陀郡の山間部では河川の増水による溢水や土砂崩れなどが集中しました。

宇陀川が流れる宇陀郡榛原町（現宇陀市）では、26日午前1時すぎから同川にそそぐ河川があふれ出し、町内で床上浸水120戸、床下浸水250戸の被害が出ました。ほかに吉野川では午後5時ごろには水位が警戒水位を40センチもオーバーする3.6メートルに達し、支流の各所ではん濫して床下浸水や家屋の基礎をえぐる被害がでて、橋が流失しました。大和高田市の葛下川や桜井市の寺川でも河川の決壊やはん濫が発生しています。

県南部は電話回線も不通となる場所が多く、中でも十津川村折立では五條や新宮両局からも通話不能となり孤立状態となりました。そこで五條電話局では27日正午にヘリコプターで無線機を搬送し折立郵便局に設置し、夕刻からようやく無線通話できるようになりました。

前日までは台風の予報も出ず、行楽シーズンの日曜日ということもあり、室生寺では参詣客247名が土砂崩れによる道路不通のために足止めとなり、寺で一夜を過ごすという事態が発生しています。また大台ヶ原でも山上で237名が山崩れで下山できなくなり一夜を明かしました。誰も予想していなかった中で突然の豪雨に襲われたことを物語っています。

27日午後5時に県警本部がまとめた各地の被害状況では、人的



橿原市の県道浸水で立ち往生した車  
（写真提供：奈良新聞社）

被害は行方不明者11（後に3名が遺体となり発見）、負傷者4となり、家屋への被害は全壊3、半壊8、流出1、床上浸水71、床下浸水1,400でした。ほか道路損壊101、橋の流失、損壊11、堤防決壊17、山崩れ176、鉄道被害2、通信施設被害9でした。また、奈良県が28日午後3時にまとめた被害状況によると、土木・農林関係の被害総額は、わずか6時間のうちに降った雨で20億円以上に上ることが分かりました（内訳は下記図表参照）。

土木関係	河川	766か所	6億1,100万円
	砂防	12か所	1,300万円
	道路	1,000か所	5億8,600万円
	橋梁	9か所	1,400万円
	合計		12億2,400万円
農林関係	農作物	-	1億2,600万円
	土地基盤	3,670か所	4億7,800万円
	林道崩壊	73か所	3,400万円
	治山	72か所	1億4,300万円
	合計		7億7,900万円
被害総額			20億300万円

9月28日に県がまとめた土木・農林被害額

### ■ 3-1 人的被害

いずれも、たまたま通りかかったために災難に巻き込まれたという事例で、1か所当たりの被害者数が多かったため、台風の規模に比べて大きな被害となりました。

#### 9月26日（日）午後1時40分ごろ 吉野郡東吉野村

木津地区を通る国道166号をふさいでいた立ち木などを5名で取り除いていると、突然、高さ50メートル、幅10メートル、奥行き2メートルにわたる土砂崩れが発生。そのまま13メートル下の高見川まで父親（50歳）と三男（18歳）、男性（40歳）の3名が押し流され行方不明となった。28日午前10時ごろに現場から60キロ下流の五條市野原町、通称北河原町の吉野川左岸“曲がり淵”にて男性が遺体で発見され、翌29日午前8時30分ごろ吉野町宮滝で、全身が土砂に埋まり右手だけを出した状態の父親の遺体が発見された。



土砂崩れが発生した東吉野村木津の現在の様子



事故現場近くに建立された殉難供養碑

その日は日曜日だったので、朝から妻と桜井に買い物に行っていました。そのときはまだ天気は崩れてなかったと思います。とにかく、雨は降っていませんでした。それが突然、店のスレートの屋根が、バラバラとすごい音を立てだしました。台風の来ることは知っていましたが、本当に急に降り出したという感じでした。ひどくならないうちに家に戻ろうと、乗ってきた車で東吉野に飛んで帰りました。佐倉峠へと抜ける県道を使いましたが、万六峠を下った辺りで両側から合流する坂道から水がどんどん流れ出していて、路上は泥で真っ赤でした。このまま進んで大丈夫だろうかという状態でした。

佐倉峠から国道に出てそのまましばらく走ると、道路の真ん中に人が立ってこちらに合図を送っています。どうやら道が通れないということでした。合図を送っていた人は電力会社の社員で、私も知っている人でした。道は少しの土砂と木の枝でふさがれていましたが、手でよければよけられないこともないようでしたので、その人と取り除こうということになりました。しかし、雨が強く目を開けていられないくらいだったので、私はふと大阪万博で買った竹で編んだ帽子が車に積んだままであることを思い出し、それを取りに少し離れたところに止めていた車に戻りました。車内にいた妻に状況を説明し、彼女は妊娠中だったのでそこに残して私は雨よけに竹の帽子をかぶり、崩落個所に戻って木を取り除く作業を電力会社の人と始めました。しばらくすると近所に住む父親と息子さん、通りかかった農協職員が手伝いに来てくれて、男5人で作業を進めましたが、手ではらちがあかないということになり、親が家にスコップを取りに戻ってくれました。2人が戻ってきて作業を再開していると、突然、どこからかゴーという音がして、気付いたら私はガードレールに引っ掛かっていました。何が起ったのかさっぱり分かりませんでした。車からその様子を見ていた妻によると、現場が一瞬で真っ黒になったということでした。すぐに、誰かがはい出してきて、よく見るとそれが私ということに気付いたそうです。農協職員も、乗ってきた車の陰に隠れて助かったようでしたが、残りの3人は辺りを見回しても土砂ばかりで見当たりません。がけ下をのぞき込むと、高見川が増水して怖いくらいの音を立てて流れていました。私はがくがくと震え、何をしゃべっているか分からないくらいだったと、後に妻は言っていました。

しばらくすると消防団の団長が駆けつけて来てくれました。その姿がとても頼もしく見えたことを覚えています。ユンボを持ってきて土砂をかき分け搜索しましたが、そこには誰もいませんでした。土砂の勢いに押されて川に落ちて流されてしまったようでした。それから10日間か20日間ほど、電力会社からも大勢の人が来て搜索が始まりました。川沿いを遠くは和歌山まで捜したようです。結局、電力会社の男性は吉野郡の宮滝で、父親は五條で見つかり、息子さんは最後まで発見されませんでした。

電力会社の人とはほかから仕事のために東吉野村に移ってきた人で、地域の集まりにも積極的に参加されるような人でした。今回も台風ということで見回りをされていたようです。まだ小さな娘さんがいました。その人の葬儀には辛くて行くことができなかつたです。地元のために道路を通れるようにしようとして命を失ってしまったことがたまらなかつたです。後から手伝いに来てくれた親子も、スコップを持って戻るのがもう少し遅れていたら、事故に巻き込まれずに済んだかも知れません。ちょっと時間が違っただけで運命が変わってしまった。私も少し立っている場所が違っていたら、竹の帽子で頭を守っていなかったら、と思うと今でもぞっと寒気がします。当時、私は村役場に勤めていましたが、役場は周辺に山が切り立ち川の合流する場所に建っていて、雨でも降ろうものなら事故のことを思い出し、もう仕事どころではないという状態でした。

そして、このとき教えられたのは、道路に石ころが転がってたら、そのうち大きく崩れる前兆なのでその場所に近づいては駄目だということでした。昔の人の知恵が正しいことを改めて思い知らされました。また、この事故をきっかけに、東吉野村の各区長は大雨が降れば区内の道路をくまなく歩いて調べるようになりました。異変があれば役場や土木事務所に届け出て、今回のような事故が発生するのを防ぐためです。それは今でも続けられています。

(東吉野村 当時30歳 男性)

9月26日(日)午後2時ごろ 吉野郡十津川村

京都から十津川にドライブに来ていた一家5名が、乗用車だけを残し行方不明になった。現場は高滝地区の国道168号で、目撃者した男性の証言によると、自動車で走行していると高滝口で高さ70メートル、長さ20メートルの土砂崩れで通行不能になっていた。男性が車をバックさせようとしたところ、20メートルほど後方にも小さな崩土が落ちているのを発見。車から降りて来た道に戻ろうとしたところ1台の乗用車が止まっているのに気付いたが、車内には人がいなかった。警察の現場検証では、山から鉄砲水が噴出し道路を洗った跡が残っていたため、土砂崩れから避難しようと車外に出たところを、鉄砲水と土砂に襲われ十津川に転落したものと見られている。祖父(71歳)、祖母(61歳)、父親(42歳)、母親(39歳)、長女(19歳)が行方不明となり、現場の土砂の中に雨傘3本とハンドバックが残されていた。28日朝の捜索で、二津野ダムで家族の物らしい衣類2点が発見されたほかは、いまだに手掛かりが見つからない。

9月26日(日)午後2時以降 吉野郡天川村

山林作業所で集材機の修理を終えた男性作業員3名が車で事務所に戻る途

# やっと二遺体発見

## 29号 残る九人の捜索続く

高滝地区の崩れで十人が行方不明だったが、天川村の三名のうち二名は、高滝地区の崩れで埋もれた。28日午後、捜索が再開された。だが、遺体は発見されなかった。目撃者は、各町界の崩れを恐れて、目撃中は、

木片の間(父)から(さん)の遺体が見つかった



## 木くずの中の下半身

### 天川村の事故現場70メートル下流で

吉野郡天川村高滝地区の崩れで、乗用車だけを残し行方不明になった一家5名が、乗用車だけを残し行方不明になった。現場は高滝地区の国道168号で、目撃者した男性の証言によると、自動車で走行していると高滝口で高さ70メートル、長さ20メートルの土砂崩れで通行不能になっていた。男性が車をバックさせようとしたところ、20メートルほど後方にも小さな崩土が落ちているのを発見。車から降りて来た道に戻ろうとしたところ1台の乗用車が止まっているのに気付いたが、車内には人がいなかった。警察の現場検証では、山から鉄砲水が噴出し道路を洗った跡が残っていたため、土砂崩れから避難しようと車外に出たところを、鉄砲水と土砂に襲われ十津川に転落したものと見られている。祖父(71歳)、祖母(61歳)、父親(42歳)、母親(39歳)、長女(19歳)が行方不明となり、現場の土砂の中に雨傘3本とハンドバックが残されていた。28日朝の捜索で、二津野ダムで家族の物らしい衣類2点が発見されたほかは、いまだに手掛かりが見つからない。

## 無残に60キロ流される

### 高見山で遺棄 五条市で見つかる

吉野郡高見山町の崩れで、乗用車だけを残し行方不明になった一家5名が、乗用車だけを残し行方不明になった。現場は高滝地区の国道168号で、目撃者した男性の証言によると、自動車で走行していると高滝口で高さ70メートル、長さ20メートルの土砂崩れで通行不能になっていた。男性が車をバックさせようとしたところ、20メートルほど後方にも小さな崩土が落ちているのを発見。車から降りて来た道に戻ろうとしたところ1台の乗用車が止まっているのに気付いたが、車内には人がいなかった。警察の現場検証では、山から鉄砲水が噴出し道路を洗った跡が残っていたため、土砂崩れから避難しようと車外に出たところを、鉄砲水と土砂に襲われ十津川に転落したものと見られている。祖父(71歳)、祖母(61歳)、父親(42歳)、母親(39歳)、長女(19歳)が行方不明となり、現場の土砂の中に雨傘3本とハンドバックが残されていた。28日朝の捜索で、二津野ダムで家族の物らしい衣類2点が発見されたほかは、いまだに手掛かりが見つからない。

## 十津川手がかり無し

### 二津野ダムで衣類発見だけ

高滝地区の崩れで十人が行方不明だったが、天川村の三名のうち二名は、高滝地区の崩れで埋もれた。28日午後、捜索が再開された。だが、遺体は発見されなかった。目撃者は、各町界の崩れを恐れて、目撃中は、

被害者の安否を伝える紙面 (大和タイムス9月29日付7面)

中、作業所から500メートルほど離れた地峯林道で高さ50メートル、幅10メートルにわたって山崩れが発生。車もろとも土砂に巻き込まれ70メートル下の箕川に転落したもよう。28日午前6時10分ごろ、現場から300メートル下流の弥山川左岸寄りで、男性（35歳）の遺体が上半身がすっぽり木くずに埋まった状態で発見。ほかの2名（30歳・40歳）は行方不明のまま。

ほかに26日午後3時ごろに大字陀で、倒れた立ち木を伐採中に民家の裏山が崩れ、居間に逃げ込んだ女性（49歳）が首まで土砂に埋まり左太ももに10日間のけがをしたほか、同時刻ごろ桜井市の県道で乗用車を運転中の男子大学生（23歳）が、がけ崩れの土砂に押し流され約3メートル下の寺川に車ごと転落したが、自力ではい上がり助かるという事故が起っています。

#### 4. この災害の特徴

低気圧が突然発達し台風へと成長したことを発見するのが遅れた理由は、当時、太平洋上に存在する台風に関する観測は、米軍の航空機による観測や海上保安庁の船舶による観測が主な手段となっていました。また、観測回数も非常に少なく、今日のような精度が高い予報を行えませんでした。現在は、短い間隔で精度のよい観測が行える観測衛星や気象レーダー等の設備も整っています。さらに、台風などの予報技術や電算機の能力も向上しました。その一方、地球温暖化や環境の変化の影響により、急激に発達した積乱雲が起こす「急な大雨」・「雷」・「竜巻」などに代表される、予報が難しい「急激な現象」による被害に遭う機会も増加しています。そういった意味では、たとえ予測技術が発達したからといってそれで安心できるというわけでなく、被害を防ぐために最も大切なのはやはり平常時からの備えであるということに、今も昔も変わりがないといえるでしょう。

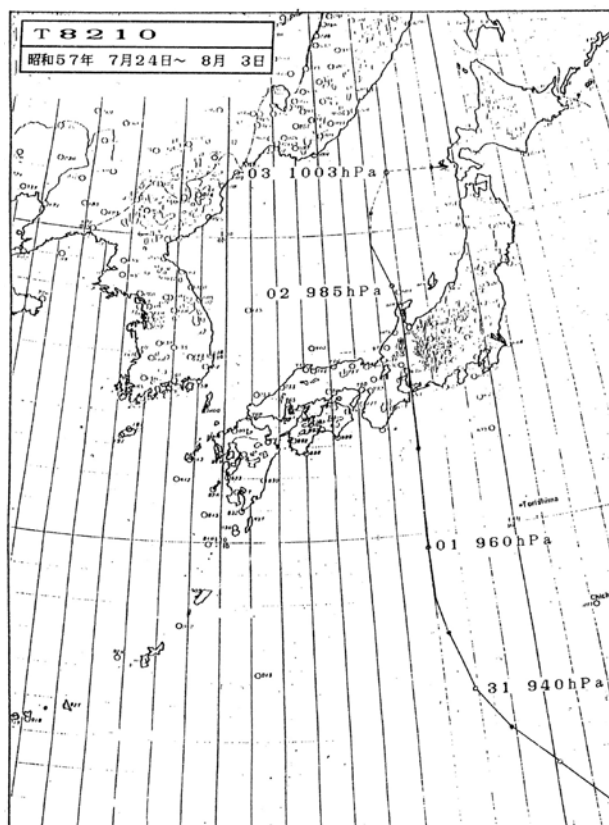
また、東吉野村の事例では、皆が通れるように道路を片付けようとした善意が3名の命を奪うという悲劇を生みました。小さな崩落があった場所はやがて大規模に崩れる前兆であるということ、安易に近づくことは大変危険であるということをお私たちに教えてくれています。

## 台風とそれに追い打ちをかけて降った 豪雨で拡大した被害

台風の襲来と、それに続く低気圧がもたらした豪雨が、県内に伊勢湾台風以来の大きな被害をもたらしました。大量の雨が2回に分けて降ったことで、たった3日の間に2度も浸水被害を受けた地域も出て県民の生活に多大な混乱を招いた一方、迅速な避難行動により多くの人命が救われました。

### 1. 台風の進路と低気圧

7月23日カロリン諸島にあった弱い熱帯低気圧が、24日午前3時に南鳥島の南南東の海上で台風第10号へと発達。その時の中心気圧は996ヘクトパスカルでした。台風は次第に発達しながら西北西に進み、29日午前9時に硫黄島南東約600キロメートルに達し中心気圧900ヘクトパスカル暴風域半径400キロメートルと最も発達しました。その後、進路を変えて30日午前9時に父島の南南西約500キロメートルの海上を通過し、31日午前9時に父島の西南西約500キロメートルに到達。やや衰えを見せながら速度も落とし進路を北北西に転じました。8月1日午前9時には鳥島の西南西約350キロメートル



台風の進路図 (『奈良県の台風40年』より)

の海上を進行し、同日午後9時に潮岬の東南東約100キロメートルの海上を通過、そのまま北上を続け2日午前0時に渥美半島から三河湾を経て愛知県に上陸しました。そこから岐阜県、富山県、石川県を北、北北東、北北西と蛇行するように進みながら能登半島に達し、同日午前5時ごろ日本海に抜けていきました。

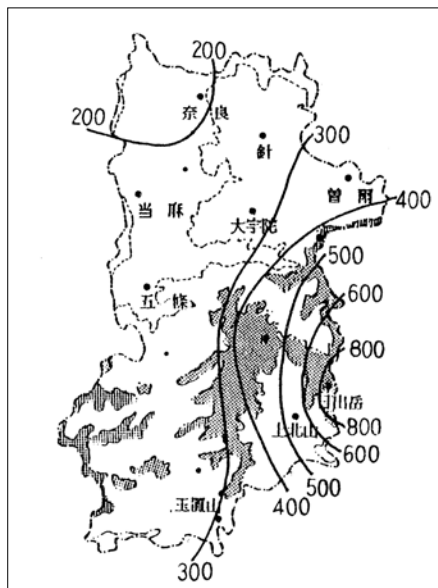
一方、台風9号から変化した低気圧は九州の東南海上を東進していて、そのまま進めば九州の一部をかすめるだけで近畿には影響が出ないと思われていたところ、2日午後9時ごろ、北太平洋の高気圧が南から張り出してきて、その影響を

受けて台風第10号の低気圧が北北西に進路を変えました。するとそれまで東進していた台風第9号くずれの低気圧が北東に向きを変え、そのまま室戸岬から足摺岬を通り、午後10時ごろから近畿地方に雨を降らせることとなりました。

## 2. 県内の天候の推移

台風第10号の接近により、奈良では31日夜から南部山岳地域で雨が降り始め、短時間で県全域に広がりました。奈良地方気象台は8月1日午前1時10分に大雨・洪水警報と雷雨注意報を発表。同日午後6時50分に台風情報第1号として「奈良県ではこれから次第に風雨が強くなる見込み」として注意を促しました。午後9時10分には、暴風雨警報・洪水警報・雷雨注意報に切り替えられ、「間もなく暴風雨になる」との予報通り各地で大量の雨が降りました。

台風は去り、8月2日午後は時折太陽も顔をのぞかせる台風一過の天候となりました。台風が通過すると2、3日間は快晴に恵まれるのが普通で、2日午後6時に奈良地方気象台が発表した3日の天気予報も「南西の風、曇り時々晴れ、ところによりわか雨」というものでした。ところがその予報から3時間後の2日午後9時ごろには、台風第9号くずれの低気圧の気圧配置が変化を見せ始めて山間部で雨が降り出し、午後10時には雨の範囲が県全域に広がりました。奈良地方気象台では午後10時40分に大雨・洪水注意報を発表し、3日午前2時50分には大雨・洪水警報に切り替えました。その後、雨は3日午後2時すぎまで降り続けました。



総降水量分布図（『奈良県の台風40年』より）



吉野川の濁流で浸水した駐車場  
(写真提供：奈良新聞社)

## 3. 被害のようす

台風第10号は奈良市で日降水量で160ミリ（8月1日観測）と、昭和28（1953）年に奈良市で観測を開始して以来、2番目となる大雨を降らせました。続く活発化した台風第9号くずれの低気圧がもたらした雨量は日降水量155.5ミリ（8月3日観測）。こちらは同じく3番目の大雨で、いわば数十年に1度あるかないかの豪雨が、たった3日の間に2回も降ったこととなります。被害が大きくなった要因の一つに、この台風や前線低気圧等の複合的な原因による大雨がありました。



3-1 各地の被害

吉野川流域

大雨洪水注意報が発表された7月31日の午後10時50分、吉野郡川上村の大迫ダムでは警戒態勢に入りましたが、その時点での大台ヶ原の雨量はゼロ。放流の計画はありませんでした。それがその後の2時間で153ミリと急激に雨が降り、「大迫ダムの水位が一日午前二時から三時にかけて、貯水位が限界の標高三九八メートルをこえ、ダム本体が危険になったため、雨量に相当する毎秒七百トンもの大量の放流が必要となった」(『奈良新聞』昭和57年8月16日「緊急報告7 検証8・1 水害」) ことで、ダム管理事業所は警報車やサイレンで警告を発し、流域の警察もパトカーで避難を呼びかけ、五條市や吉野町でキャンプをしていた約800名が避難。それ

# 県下の死者・行方不明16人に

## 追い打ち豪雨 傷跡拡大

再び大和川決壊、葛下川はらん  
農林、河川関係  
被害総額223億円



まるで海の中の家 // 雨のあい間をぬって戻まで水につかり自宅の様子を見に帰る人たち (3日午前11時、北葛城郡王寺町久度昭和商店街にて)

### 崩土交通網ズタズタ

阪奈道路も 国鉄など相次ぎ不通

県民の足 大打撃

「二日連続の大雨が原因で、大和川流域を中心に、奈良県内各地で土砂崩れや崖崩れが発生し、交通網が寸断された。特に、大阪府から奈良県にかけての主要道路や、奈良県内各地の河川沿いの道路が、大規模な被害を受けた。また、大和川流域を中心に、農林関係の被害も拡大している。被害総額は223億円に達している。」

### 野菜・果実 入荷激減 卸値は三、四割高に

大和川流域を中心に、農林関係の被害も拡大している。特に、野菜・果実の収穫量が激減し、市場での入荷量が大幅に減少した。これにより、卸値が三割から四割高に暴落している。関係者は「被害が拡大しているため、出荷量が激減し、市場での入荷量が大幅に減少した。これにより、卸値が三割から四割高に暴落している。関係者は「被害が拡大しているため、出荷量が激減し、市場での入荷量が大幅に減少した。これにより、卸値が三割から四割高に暴落している。」

### 県市町村道 各地で寸断

大和川流域を中心に、県市町村道が各地で寸断されている。特に、奈良県内各地の河川沿いの道路が、大規模な被害を受けた。また、大和川流域を中心に、農林関係の被害も拡大している。被害総額は223億円に達している。」

### 午後5時に再開

大和川流域を中心に、県市町村道が各地で寸断されている。特に、奈良県内各地の河川沿いの道路が、大規模な被害を受けた。また、大和川流域を中心に、農林関係の被害も拡大している。被害総額は223億円に達している。」

台風の後の豪雨で被害が拡大したことを伝える新聞 (『奈良新聞』8月4日付1面)

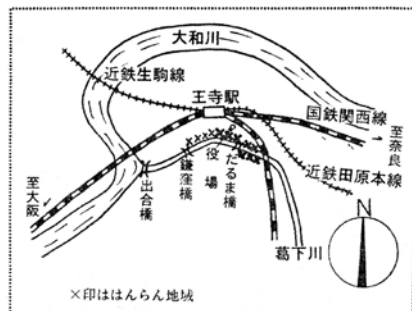


堤防が決壊した大和川（初瀬川）（写真提供：奈良新聞社）

でも警報に気付かずに6名が犠牲となり、川中にとり残されたキャンプ客がヘリコプターで救助される事態になりました。



天理市内の県営団地での片付けの様子  
（写真提供：奈良新聞社）



王寺での河川の溢水箇所  
（『奈良新聞』8月9日付より）



水が引いた商店街（写真提供：奈良新聞社）

### 磯城郡田原本町

町内を流れる大和川（初瀬川）の堤防が決壊したのは1日午後10時すぎでした。鍵や唐古などの遺跡が残る古代から続く穀倉地帯だった周辺地域は、「一回目の決壊だけで、町の作付面積全体の二分の一にあたる水田二百三十ヘクタール、その他ナス、キュウリ、イチゴ、花など合わせて約九百ヘクタールが冠水」（『奈良新聞』昭和57年8月11日付「緊急報告3検証8・1水害」）という

状況でした。2日朝から土木事務所や地元消防団、陸上自衛隊が土のうを積むなどして応急措置を施したものの、2日夜から再び降り出した大雨で3日午前3時に同じ場所が決壊してしまいました。あふれ出した水は約1キロ西側の国道24号を広範囲に覆い尽くし、国道西側の田畑まで浸水させました。このふたつの水害で、田原本町では床上浸水432戸、床下浸水620戸、2,751人が被害を受けました。

また、隣接する天理市の県営団地にも初瀬川の濁流が押し寄せ、3日の午前11時ごろには床上30センチまで浸水するなどの被害が出ました。

### 北葛城郡王寺町

8月1日の夜からの雨で町内を流れる大和川とその支流となる葛下川の水量が増大しました。そして、午後10時30分ごろ葛下川の右岸鎌窪橋付近で溢水の危険が出たため、土のうを積むなどして対処したものの20分後ついに水があふれ出し、同橋から役場前の達磨橋までの600メートルの範囲で浸水。水はたちまち王寺駅周辺に流れ込みました。住民およそ2,000人は近隣の公共施設や学校、寺院などに避難しました。

葛下川の水位は2日午前4時20分ごろから下がり始め、日中には天気も回復したので、住民は家に戻り、掃除や食料の調達などに走りました。自治体も伝染病予防の消毒を開始するなど、早くも復旧作業に取り掛かりました。ところが、後片付けに疲れた住民に追い打ちをかけるように、夜になってまた雨が降り出しました。そして、同6時40分ごろ、ついに<sup>だるまばし</sup>出合橋付近から溢水。その2時間後には達磨橋付近でも水があふれ、「大和川と葛下川の堤防に囲まれた形の王寺駅一



川ようになった王寺町役場前 (写真提供：奈良新聞社)



浸水した王寺駅南側 (写真提供：奈良新聞社)

## 証言

26歳で独立して大阪で飲食店を経営していましたが、5年ほどして新しく店を出さないかという話をいただき、王寺駅の南側で店をすることになりました。オープンは昭和56年7月1日でした。自家製のフレンチを提供するレストランで、おいしい料理を安く出すようにしたので多くのお客様に来ていただきました。私は当時から香芝に住んでいて、早朝のモーニングから昼のランチまで王寺の店にいて、大阪の店に行き夜遅くまで仕事をするという忙しい毎日でした。

水害が起きる前は、1週間ほど雨が降り続いていた印象が残っています。その日、時間ははっきりと覚えていませんが、大和川と葛下川<sup>かつげ</sup>の合流している地点があふれているという話を聞いたものの、店から1キロほど離れた場所のことだったので、そう深く気にはとめませんでした。それがしばらくして店まで水が流れ込んできました。店は半地下でしたが排水設備もあるので当初は問題ないと思っていました。それがだんだんと排水が追いつかなくなり、水かさ<sup>みずかさ</sup>がひざまで来て、あっという間に胸の高さまでになりました。

当時、店の寮が川の近くにあり従業員はそちらに帰らせましたが、後で聞いたところでは、1階部分がすっかり水に漬かってしまっていて周囲は海のようになり、そのときに初めて恐怖を感じたということでした。それ以上水が増えればもう屋根の上に逃げるしかないという状態だったそうです。

私は鹿児島県の出身で、しょっちゅう台風が直撃するような環境だったので、店内に水が浸入してきたときも、そう慌てることはありませんでした。鹿児島では台風が来れば田んぼが水に漬かってしまい、翌日、そこに打ち上げられた魚をよく捕りにいったものです。そういう環境に育ったためか、あまり水に対する恐ろしさを感じることもなく冷静でいられました。過信はいけませんが、やはりあいつた場合は慌てないことが一番重要だと思います。胸まで水が来たので外に出ましたが、屋外はひざくらいまでの水深でした。水の流れはゆっくりしていますが、水かさは一気に上昇するという感じでした。結局、店内は天井近くまで水が上がったので、あのまま店にいたら命を落としていたかもしれません。

私はとにかく水のないところまで移動しようと歩き出しましたが、水の感触が知っているものとは違いました。体にまとわり付く嫌な感じでした。うちも飲食店という商売柄、油を使っていましたが、水にそういった油分が混じっているのだと分かりました。そこに下水の汚れた水が混じり、強烈な臭いを発しています。道路は一面水たまり状態になっていた

ので溝などにはまらないように注意して真ん中を歩きましたが、木片などが流れて来て、それに足を取られ汚い水の中で転倒でもしたら大変だと、そのとき初めて危険を感じました。そのような経験をして思ったのは、とにかく水が来たら遠くには行かず近場で、基礎のしっかりした高い建物の中に避難するのが一番だということです。粘り気のある異臭を発する水に全身がぬれでもしたら、それだけで冷静な判断もできなくなってしまい、二次災害に巻き込まれかねません。とにかく極力水にぬれることを避け、近場の高いところに逃げるのが肝心だと思いました。

次の日、ある程度水が引いてから店に行ってみると、それはひどい状態でした。使えそうなものはナイフとフォーク、一部の食器類くらいであとはほぼ全滅でした。現場では水も出ないし洗剤類もなかったので、備品をすべて私の香芝の自宅に運び込むことにしました。運搬は従業員の知人がダンプの運転手だったのでその人をお願いしました。災害直後なので当然、車はすんなり動かすことができず、香芝まで行くのに丸1日かかったように記憶しています。そして、自宅で水洗いをするのですが、単に泥水に漬かっただけでなく油類も流れ出していたので、簡単にきれいになる状態ではありませんでした。籐製のテーブルや椅子は乾かすと籐が破裂してしまい買い換えるほかない状態でした。

水が引いた店内は、<sup>さん</sup>木の溝などあらゆる隙間に泥が入り込んでいて、しかも油を吸って粘り気があったため洗い落とすのに苦労しました。汚水の臭いも相当に染みこんでいました。しかし、一刻も早く店を開きたかったので、そんなことにひるんでいる場合ではありませんでした。

そうして再び開店させるための準備に奔走していたとき、2回目の浸水が起きました。2日後くらいのことだったと思います。それで店内の壁も落ちてしまいました。従業員が必死になって片付けてくれた労力もそれで全部台無しです。さすがに立て続けに2回もとなると、怒りの声があちらこちらで上がったようでした。今では「昭和57年の水害」とひとくくりで語られていますが、当事者にしてみれば全く別の水害に2度も遭遇したようなものです。その時の私にあったのは、怒りよりもどうすれば早く商売が再開できるようになるかという思いだけでした。テナントの契約もまだ残っている状態で開店のために借金もしています。あきらめるという選択肢はありません。とにかく無我夢中でした。備品を買いそろえ突貫工事で内装を改修してもらって、2週間後にはオープンさせました。

再開したときには周辺の店はほとんど復旧していないような状況で、近くにあった大型店舗もまだ閉店したままだったと思います。店には町の片付けをしている人や工事業者の人が食べに来てくれました。大変な中食べに来ていただいたお礼の気持ちもあり、店が暇な時間帯などには従業員らが片付けに手伝いに行ってくれました。当時はとにかく自分のことだけに必死でしたが、今にして思えば、荒れ果ててしまった場所にいち早く商売を再開させたことで、少しは皆さんの励みにもなったのかも知れないとも考えています。結局、ああいう局面では自分のすべきことをして貢献するしかないのでしょうか。

災害に遭いながらも、同じ場所で何とか商売を再開させましたが、普段やり慣れないような仕事を懸命にしたせい、ついに体を壊してしまいました。十二指腸潰瘍を患い、2年間のうちに治ったり再発したりを4回繰り返し、医者から命の保障はできないと忠告されました。当時は災害のせいで体を壊してしまつたと恨むこともありました。しかし、今にして思えば大阪と奈良の2店舗を忙しく行き来して、体にもかなり負担がかかっていたのだと思います。災害のおかげ、と言つてはいけないのですが、弱っていた体のことを手遅れになる前に気付かせてくれて、逆に命を救われた結果になりました。それと水をかぶった店舗の修繕費に多くの借金を背負うことにもなりましたが、それをきっかけに、経費のかさまない効率的な店舗経営について考えるようになりました。そうして行き着いた結論が、現在の<sup>なりあ</sup>生業であるラーメン店だったのです。

もしあのとき、少しでも悲観的になっていたら、今の私は無かったでしょう。確かに水害で余計な苦勞もさせられましたが、その反面で助けられることもあった、今はそう思えるようになりました。

(どうとんぼり神座社長 布施正人さん 当時32歳)

帯は水の逃げ場がなく、一時は人の首までつかる水位となった」（『奈良新聞』昭和57年8月4日付「濁流！家も道路も田畑も…」）という状態でした。同地区内の商店街は軒並み床上数十センチの浸水し、中には軒先まで水に漬かった店舗も出ました。二度のはん濫で1,925世帯5,064人に被害をもたらした葛下川の河水は、午前11時ごろゆっくりと引いていきました。

### 吉野郡西吉野村（現五條市西吉野町）

台風が去って安心したのもつかの間、西吉野村でも8月2日午後9時から3日午後4時までにかけて186.5ミリもの大雨が降りました（村役場で観測）。

雨が小やみになった3日午後3時10分、地元男性が村内の通称「くえ山」で1.5センチの亀裂を発見し消防団に通報。亀裂は20分後には20センチにも拡大しました。8月4日午前1時に亀裂は1メートルにも達し、午前1時30分には避難地区を拡大。148世帯、580名が村内の学校施設に避難しました。それから約10分後には幅7メートル高さ30メートルの小さな地すべりが起り、午後2時5分ごろ幅「通称クエ山が「ゴッー」という音とともに幅三百メートル、高さ百五十メートルにわたってくずれた」（『奈良新聞』昭和57年8月5日付「吉野の山大崩壊、丹生川止める」）。約50万立方メートルの土砂が民家を押し流し、幅30メートルの丹生川をせき止めてしまいました。土砂ダムでせき止められた濁流は約1キロ逆流し高さ約8メートルの土手を越えて集落に流れ込み数十件が床下浸水し、村内を南北に縦断する国道168号にも水が達しました。

土砂は水流で少しずつ流れていき水も引いて小康状態となり、避難していた住

# 吉野の山 大崩壊、丹生川止める



流出した土砂で丹生川がせき止められた（吉野郡西吉野村和田）

四百五十年の歴史にかけ、吉野郡西吉野村で約三世紀にわたって山崩れを起し、明末といわれた丹生川がせき止められ、山中に閉じこめられた。山崩れが起ると、丹生川の水がせき止められ、田舎を流す。二三日が経たず、田舎を流す。また、国道168号も水に流され、安全確保がとれない。西吉野村の森田から和田にまで、大崩れが起ると、影響が心配される。【吉野郡西吉野村和田】

西吉野村

農協倉庫から農産

土砂、濁流民  
168号線も  
ストップ逆流：

西吉野村和田の大崩壊を伝える新聞（奈良新聞一面8月5日付1面）



背後に迫った土砂（西吉野村）（写真提供：奈良新聞社）



2年後に工事完了した西吉野村屋那瀬・和田の  
山崩れ現場（写真提供：奈良新聞社）



孤立した団地にボートで赤ちゃんのミルクを運ぶ  
（大和郡山市）（写真提供：奈良新聞社）

民はいったん帰宅し散乱した家財の後片付けを行い始めました。しかし、午前8時に再び地滑りの兆候が見えたため、住民は再度避難しました。2回目の崩壊は午前8時25分ごろ。「クエ山が再び幅三百メートル、高さ二百メートルにわたってくずれ」（前掲紙）、流れ始めていた丹生川を完全にせき止めてしまいました。

川の水は再びあふれ出し、新たに9戸が浸水。西吉野農協の玄関前は水深約2メートルにも達し、倉庫から除草用の農薬が流出する騒ぎもありました。住民は着のみ着のままで家を飛び出したような状況でした。

2度の大規模崩壊によりできた土砂ダムは決壊の恐れがあり、下流の五條市には鉄砲水が襲う危険があるとして住民が避難しました。西吉野村の西吉野村の地元消防団員など約140名は丹生川をふさぐ土砂を取り除いたり、土のうを積んで水の流れを変えたりと懸命の作業を続けた結果、午前10時には決壊の心配はなくなりました。午前11時には県の要請によって自衛隊員が災害救援のために現地入りし、午後には住宅や国道にあふれた水がようやく引き始めました。

自衛隊員は「五日午前七時から六日午後五時ごろまでにかけて、全員で丹生川の土砂を取り除き、流れをよくする一方、増水時に備えて、民家などを守るため、高さ一・五メートル、幅二メートル、長さ二五〇メートルの土嚢を積み、臨時堤防を築いた」（『西吉野村のあゆみ』）などの応急処置に努めました。しかし、復旧作業中に崩れ落ちた山の近くに建っている家屋が15分間で3センチ傾くなど、なお山崩れの心配は続きました。

そこで、五條土木事務所では数か月かけて川幅を広げる工事を行い、その後、約20億円の費用を投じて地滑り再発防止の本格工事に着手し、昭和59年の7月に完工しました。

台風とそれに続く大雨では、県内に被害の出なかった地区はないというほど、そこかしこに被害をもたらしました。特に鉄道や幹線道路などの交通網は県全域でズタズタにされ、県民の足に大打撃を与えました。また、佐保川のはん濫で大和郡山の団地一帯が濁流に覆われ600世帯が孤立したほか、桜井市の談山神社では石垣と土手が幅約40メートル、長さ100メートルにわたって崩壊し、重要文化財の建造物が倒壊する危険にさらされるなどの被害が発生しました。



談山神社拝殿脇で石垣と土手が崩壊  
(写真提供：奈良新聞社)

### ■ 3-2 人的被害

台風第10号の影響で13名が命を奪われ、その後続いた豪雨でさらに3名が犠牲になりました。その地域は県北西部から中和あたりとなり、大きな水害や土砂災害があった場所とは直接に関係ない所で発生したのが特徴です。

#### 8月1日午後10時ごろ 高市郡明日香村

下畑にある常龍寺の裏山が崩れ、寺に避難していた男性（53歳）の家族4人が生き埋めになり、長男は自力で脱出。妻も救出されたが、男性と二男（20歳）が死亡した。男性の家はこの寺から50メートルの場所にあり、数年前に土砂崩れで家の一部を破損したことがあり、以来大雨のときは同寺に避難するようにしていたという。

#### 8月1日午後10時30分ごろ 生駒郡平群町

薬局経営の男性（46歳）方の裏山が高さ30メートル、幅10メートルにわたって崩壊。木造二階建ての家屋の2階部分を残して押しつぶし、さらに西向かいの計理士の男性（52歳）方と会社員の男性（49歳）方の表半分をえぐりとっ



押しつぶされた常龍寺(明日香村) (写真提供：奈良新聞社)



生駒郡平群町の被災現場 (写真提供：奈良新聞社)



桜井市谷旭町の現場 (写真提供：奈良新聞社)



吉野川増水事故発生地点 (●印)

以下は、大迫ダムの緊急放流による吉野川増水での被害発生の状況です。6名が行方不明になり懸命の捜索が続けられましたが、8月9日に家族の申し出により捜索本部は解散されました。後日4名の遺体は発見されましたが、2名はいまだ行方不明のままです。

### 8月1日午前5時ごろ 吉野郡吉野町

吉野川の中州でキャンプをしていた小学校教諭男性(29歳)が増水のため脱出が遅れて流され、行方不明に。31日午後3時ごろから友人と2人でキャンプを始め、午後10時ごろ就寝。午前4時すぎに水が迫っているのに気付いたが、5時ごろ中州は完全になくなり、水流は胸元まで来た。寝袋を浮き

輪がわりに背中に巻き、2人で手をつないで左岸へ渡ろうとしたが、200メートルほど流され、大きな衝撃を受けたあと離れ離れになった。友人は岸に自力でたどりついた。



孤立者が奇跡的にヘリで救出された吉野川の岩場 (写真提供：奈良新聞社)

### 8月1日午前6時10分ごろ

#### 吉野郡吉野町

吉野川の中州でキャンプをしていた会社員男性(48歳)と友人が増水のため引き返そうとする際、会社員男性が中州に取り残されて草にしがみついていたが、力尽き、そのまま流された。2人は31日午後4時ごろからキャンプを開始。眠っているうちに水位が上がった。

### 8月1日午前6時40分ごろ 五條市

た。薬局店経営男性と妻(47歳)、母(68歳)、また、計理士男性の長男(25歳)の4人が生き埋めとなった。1時間後に母は救出。3名は遺体で発見された。

### 8月1日午後11時50分ごろ 桜井市谷旭町

同市谷旭町の東光寺山で高さ20メートル、幅30メートルにわたって土砂が流出。木造2階建て約100平方メートルの瓦職人男性(53歳)方と、屋根ふき業事務所約200平方メートルが全壊。また男性(78歳)方木造平屋建て約30平方メートルの家屋が半壊した。この山崩れで瓦職人男性と、その次男(27歳)が生き埋めになり、死亡。この2人は親子で家の補修をしていたところを襲われた。



吉野川でアユ釣りをしていた男性（48歳）と友人男性の2人が逃げ遅れ、近くの中州にたどり着いた。友人男性は自力で泳いで岸にたどり着いたが、男性は濁流にのみ込まれ、行方不明になった。

#### 8月1日午前6時40分ごろ 五條市

吉野川にかかる阿田橋の下流で流木にしがみついている男性（42歳）を近所の人が発見。消防署員などが救助に向かったが、7時10分ごろ目撃されたのを最後に行方不明になった。

#### 8月1日午前6時40分ごろ 五條市

米穀商の男性（49歳）、米穀店経営の男性（46歳）の2人は、釣り仲間4人と吉野川でアユ釣りをしていたが、増水のため右岸に上がろうとした途中で流され、行方不明になった。米穀店経営の男性は首にクーラーポットをかけたままで岸へ行こうとして、その重みで水にのまれたらしい。

以下は、8月2日の夜から降った「追い打ち豪雨」による被害発生状況です。



崩れた裏山と断食道場（三郷町）  
（写真提供：奈良新聞社）

#### 8月3日午後4時20分ごろ 大和郡山市

通称平尾池で農業の男性（55歳）が死んでいるのを近くの住民が発見。男性は同日午前10時ごろ現場近くの裏山の畑を見回りに出かけたまま帰ってこなかったため、家人らが行方を捜していた。現場の状況から鉄砲水に押し流されて、池にはまり水死したらしい。

#### 8月3日午前7時20分ごろ 生駒郡三郷町

信貴山にある断食道場の裏山が高さ30メートル、幅10メートルにわたって崩れ、道場の東部分にある本館東側の木造2階建て住宅の一部345平方メートルを押しつぶした。このため、1階六畳間にいた道場主（73歳）の孫（18歳）と四畳半の間にいた孫（13歳）が生き埋めに。孫（13歳）は自力ではい出したが、1人は死亡。



樹木をなぎ倒しゴルフ場の池を埋めた土砂（斑鳩町）  
（写真提供：奈良新聞社）

#### 8月3日午前10時ごろ 生駒郡斑鳩町

同地斑鳩ゴルフセンターで山の斜面が崩れ、コースを見回っていた同センター経営者の男性（66歳）と長男（32歳）の2人が土砂に埋まった。地元消防団員らが間もなく2人を救出したが、経営者の男性は死亡。長男は右足に重傷を負った。

上記のほか、3日朝に奈良市西部で土砂崩れで家屋が傾き、自宅にいた85歳の女

性が家具の下敷きになって手足にすり傷を負ったり、同日午前9時に平群町で2人が生き埋めになって、それぞれ肋骨骨折、足の骨折と大けがを負うという事故が起っています。

### ■3-3 被災者への救援

田原本町や王寺町の浸水被害の情報を受けて県では、2日午前3時に災害対策本部を設置。760人の職員を動員して被害状況の把握に走りまわりました。その結果、まず同3時30分に王寺町に災害救助法が適用され、続く午前9時30分に田原本町、午後6時45分には御所市に、翌3日午前11時には天理市に、それぞれ適用されました。同法が適用されると日常生活品や食料品が配布され、そのほか16市町村に「県小災害に対する救助内規」を適用し、救援物資を配布しました。

# わが町わが家に再び活気を



漂流で壊まった瓦の中からはアイスなどの残骸を振り出す農家の人々。商品価値があるのは半靴程度という(嵯峨郡田原本町小坂で)

## 泥の海から…復旧へ全力

### 「早く商売したい」

#### 王寺



浸水した家具が道路一面に覆れ通り封鎖もやっと(4日午後1時すぎ、北嵯峨郡王寺町久度で)



#### 田原本

### 専門農家に大打撃

#### 消毒、ゴミ処理やつき

田原本町は、田原川が氾濫し、町内各地が水浸しになった。被害を受けた農家は、収穫した作物が水浸しになり、大きな被害を受けた。また、町内各地で、消毒やゴミ処理などの作業が行われている。町民は、早く復旧を希望している。



#### 思い切った河川改修必要

河川の改修は、一時的な復旧だけでなく、長期的な対策が必要である。専門家の意見によると、河川の改修には、思い切った決断が必要である。また、河川の改修には、住民の協力も必要である。



田原本町小坂に避難した被災者の生活の様子(5日午後)

### 畳干しなどにてんやわんや

#### 被害一億円の仕事場

#### 天理 庵治団地



天理市の庵治団地では、被害が一億円に達した。被災者は、生活に大きな支障をきたしている。また、被災者は、生活に大きな支障をきたしている。また、被災者は、生活に大きな支障をきたしている。

困難の中、復旧を始める  
(「奈良新聞」8月5日8面)

また、浸水被害のあった地域では保健所を通じて防疫のための消毒作業が実施されるとともに、王寺町と西吉野村（現五條市西吉野町）では臨時診療所も設置されるなど、健康面での救援活動も行われました。

義援金は地方公共団体などから700万円余りが早々に寄せられ、天皇皇后両陛下よりお見舞金が県に下賜されました。しかし、被害総額896億5,200万円という被害から復旧するのは並大抵のことでなく、県は国に激甚災害に指定するよう要請しました。その結果9月18日付で指定されることになり、復旧工事や融資に関して財政的な優遇措置が国から受けられることになりました。

#### 4. この災害の特徴

台風10号とそれに続く台風第9号くずれの低気圧により、2度にわたって大量の雨が降ったため被害が大きくなりました。

7月31日から8月3日までの間に、奈良地方気象台で観測が始まった昭和28年以來、日降水量の第2位（8月1日に観測した160ミリ）と第3位（8月3日に観測した155.5ミリ）に記録される大雨が降りました。そのため王寺町や田原本町では浸水被害が発生し、西吉野村（現五條市西吉野町）では大きな土砂災害が起ったほか、県内各地で土砂や水による災害で人的被害が出ました。

明日香村では、昔から「村で一番安全な場所」と信じられていた寺院を土砂崩れが襲い、避難していた一家のうち2名が命を落とすという被害が出ました。災害に対しては「これが絶対」という対策を立てることがいかに難しいかを示しています。

#### 『大和川流域総合治水対策協議会の設置』

昭和57年の大和川大水害を契機に、治水施設の積極的な進捗と流域の持つ保水・遊水機能の適正な維持の実施を図るため、奈良県内の流域25市町村（当時）と奈良県及び国土交通省（旧建設省）近畿地方整備局は、昭和58年に「大和川流域総合治水対策協議会」を設置し、流域全体で水害に強いまちづくりを行なう、「総合治水対策」に取り組むことになりました。

